小児 CAPD 患者の成長と水溶性ビタミンについて

飯高喜久雄，北條みどり，伊藤民恵，酒井　糾

過去7年間に経験した12才以下のCAPD患者16例の成長の観察と10例の水溶性ビタミンの血中濃度の測定を行った。開始時のSDSは平均－2.63で，2年目までに平均して1.0のSDSの減少がみられたが，これ以降は横ばい状態であった。血中ビタミンB1，B2，B6の低値が各々2～3例にみられたが，B12，C，葉酸は血中濃度の低値を示した症例はなかった。

CAPD，　SDS，　水溶性ビタミン

I，はじめに

我々の施設では1981年6月にCAPDを導入して以来，1989年8月までに15才以下の男子20例，女子6例の計26例にCAPDを施行した。平均年齢は6.9才で，6才以下の小児が13例と丁度半数を占めていた。原疾患は先天性腎疾患が11例と1番多く，その内訳は形成不全，低形成腎7例，逆流性腎症2例，閉塞性腎症1例，先天性ネフローゼ症候群1例であった。次にネフローゼ症候群8例，慢性糸球体腎炎5例，溶血性尿毒症症候群1例，新生児期髄膜炎後の急性尿細管壊死1例となっていた。CAPDの継続期間は2から72か月間で，合計828透析か月，平均31.8透析か月であった。最終観察時に15例がCAPDを継続しており，1例が腎移植後CAPDに戻って来ていた。この内5例が高校生となったため当院腎センターや他院へ紹介され移ったため，現在11例が小児科にてケアーされている。繰り返す腹膜炎のためカテーテルを抜去し，CAPDを中止し，血液透析へ移行した者は5例いるが，この内1例は拒絶反応のためCAPDの再導入が必要となった。また2例は頭蓋内出血のため，1例は心不全のため計3例が死亡していた。

II，研究方法

これらの症例の内CAPD療法を行っている間に1年以上にわたり身長の伸びを観察できた12才以下の16例を対象として成長についてまとめてみた。男子15例，女子1例であった。CAPD開始時の年齢は平均6.0才，原疾患は先天性腎疾患7例，ネフローゼ症候群6例，慢性腎炎2例，急性尿細管壊死後1例となっていた。観察中のCAPD継続期間は13か月から72か月間で，合計624透析か月，平均39.0透析であった。また10例において水溶性ビタミンの血中濃度を測定した。

III，結果

身長の伸びを標準成長曲線にプロットしてみると，標準成長曲線よりはずれて行く者，そって成長している者，また稀にCatch up growthを示す者とさまざまであった。そこで成長を（患者の身長－標準平均身長）／標準偏差

北里大学医学部小児科，泌尿器科

（SD）で求めた身長のStandard deviation score（SDS）にて評価してみた。はじめに各症例の身長のSDSの変化をみてみると，開始時のSDSの平均は－2.63±1.59（n＝16）であった。そして経過観察中にSDSの上昇した者も減少した者もあり，最終観察時には－2.88±1.51（n＝16）と全体としてはあまり大きな変化はみられなかった。しかし1年毎のSDSの平均を追ってみると，1年目は－2.78±1.52（n＝16），2年目は－3.65±1.34（n＝12），3年目は－3.56±1.39（n＝8），4年目－3.23±1.49（n＝7），5年目－3.85±1.31（n＝4），6年目－3.80（n＝2）となっており，2年目までに平均して約1.0のSDSの減少がみられ，それ以降は横ばい状態であった。

次に腹膜透析中に水溶性ビタミンのPD液中への喪失による欠乏がしばしば問題になるが，今回測定したCAPD患児10例中血中ビタミンB1，B2，B6の低値が各々2～3例にみられたが，B12，葉酸は血中濃度の低下を示している症例は1例もなかった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

過去7年間に経験した12才以下のCAPD患者16例の成長の観察と10例の水溶性ビタミンの血中濃度の測定を行った。開始時のSDSは平均一2.63で,2年目までに平均して1.0のSDSの減少がみられたが,これ以降は横ばい状態であった。血中ビタミンB1,B2,B6の低値が各々2〜3例にみられたが,B12,C,葉酸は血中濃度の低値を示した症例はなかった。